

介護職員自己評価表

2023年1月26日

事業所名	通所介護　デイサービスリハビリセンター瀬々串		正社員	非常勤社員
		社会福祉士 介護福祉士 理学療法士 介護支援専門員 実務者研修修了者、その他 准看護師	1人 5人 3人 1人 2人	1人 1人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備　考
前回の課題に関する改善	17.2%	34.3%	33.3%	15.2%	

前回の改善計画	生活全般の支援に加えて、メンタル支援をおこなう生活支援員、有酸素運動やレジスタンス運動を担当するトレーナー、機能訓練を担当する理学療法士、健康観察を担う看護師によりケアをおこなっているが、それぞれの職責に違いがあり、技術習得に関する教育、悩みやストレスの感じ方も異なっていた。なかでも、認知症対象者に向けた対人援助技術については、全ての専門職にスピーチロックに関する知見とスキル向上が求められた。改善に向けた取り組みとして、業務中に生じた課題解消を図るOJT、外部講師による研修の拡充、介護技術全般の社内研修を計画した。比較的元気なご利用者が多く、業務の中では介護技術の取得が難しいことから、業務終了後に30分程度の残業をお願いし、移乗・移動介助を除く介護技術のスキルアップを図る計画とした。悩みを一人で抱え込まさない取組みと高頻度の面談を計画した。
前回の改善計画に対する取組み結果	生活支援員は認知症ケアを安定的に提供できるようになった。トレーナーは、理学療法士による社内研修でスキルアップを図り、下肢筋力の向上に向けたパワーリハビリ、小集団でおこなう二重課題を課したコグニサイズなど、フィジカルトレーニングが提供できるようになった。スピーチロックのないコミュニケーションは、外部講師による研修で事例検討およびロープレをおこない、適切なコミュニケーションを心掛けている。理学療法士とトレーナーが連携し、手続き記憶を活かした巧緻作業、園芸療法によるストレス緩和や心身の健康回復は、試みたものの定着にはつながらず、取組みの改善と変更が問われ、研修が必要なが分かった。一方、新人スタッフは不得意な項目が複数あり教育プログラムを検討する必要があった。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合　計
SECTION　1	対象者の接し方や態度について	22.2%	0.0%	66.7%	11.1%	100%
SECTION　2	仕事上の態度について	22.2%	11.1%	55.6%	11.1%	100%
SECTION　3	食事について	22.2%	33.3%	33.3%	11.1%	100%
SECTION　4	移乗や移動について	22.2%	44.4%	22.2%	11.1%	100%
SECTION　5	排泄について	11.1%	33.3%	33.3%	22.2%	100%
SECTION　6	入浴について	22.2%	11.1%	55.6%	11.1%	100%
SECTION　7	着替えや整容について	11.1%	44.4%	22.2%	22.2%	100%
SECTION　8	服薬について	0.0%	88.9%	0.0%	11.1%	100%
SECTION　9	意思疎通について	22.2%	22.2%	33.3%	22.2%	100%
SECTION　10	行動障害について	11.1%	55.6%	22.2%	11.1%	100%
SECTION　11	普通の生活やアクティビティについて	22.2%	33.3%	22.2%	22.2%	100%

自己評価及び改善が必要な事項	生活支援員は認知症ケア等のメンタル支援を担っている。懐かしい絵を用いたミッケルアート回想療法、回想ライブラリーによる懐かしい動画やテレビ番組を活かした回想療法、顔表情に基づくSOLOデジタルセラピー、手続き記憶を活かした巧緻作業を組み入れた回想療法、植物の心地よい刺激を活用した園芸療法を計画したが、物の準備を要する手続き記憶と園芸を用いた支援は実装できなかった。手先や指先を用いる支援は認知症ケアとして効果が示されているので、実施につながっている事業所を巻き込んだ勉強会の開催が必要であった。フィジカルトレーニングを担当するトレーナーは、理学療法士によるOJTに加えて、社外研修を通して健康運動実践指導者の取得を目指すソフト調整が必要であった。コミュニケーションは、話し方は丁寧でもスピーチロックにつながる声掛けがみられ、社内外の研修を通してスキルアップを図る必要があった。コロナ禍の対応もあり、スタッフのメンタル負担の把握と業務上の課題解消を図るために、必要に応じてしっかりと話し合える環境が必要であった。
主任　梅津　豊	

外部評価者	新型コロナウイルスの第8波が到来し、感染拡大が続いている中、厳しい感染対策をおこないながらの運営は大変なことも多いと思います。様々な支援を多様な役割の専門職が提供していました。一方、連携や役割分担が難しいと思っている職員がみられ、潜在化した負担があるように感じました。悩みや課題を抱えている職員に寄り添える、必要に応じてしっかりと話し合える環境を検討してください。スーパービジョンは高頻度でおこなっているようですので、悩みを抱え込まさない支援に努めてください。本年度も新しい職員が入社していました。既に、介護福祉士実務者研修を修了され、外部講師による認知症ケア研修を複数受講し、認知症に関する基礎的スキルに加えて、コミュニケーションスキルの研修など、職員教育に力を入れていることが確認されました。職員が資格取得を目指す仕組みは評価できます。利用者にスピーチロックを意識した声掛けを、事業所をあげて取り組み、心身の健康を複数の支援で目指していました。なかでも、小集団でおこなうコグニサイズ、回想療法、顔表情に基づく心理療法は、参加意欲が高いことが確認されました。身体機能の向上は、機器を取り入れた有酸素運動やレジスタンス運動で図り、国が推進する科学的介護に則した支援が提供されていることが分かりました。総合的な評価は、利用者に適した興味深い取り組みが複数提供され、多職種が協働してサービス提供していることが推察できました。今後地域に根ざした事業所として頑張ってください。
〒891-0141 鹿児島市谷山中央5丁目37-11-302 特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所 社会福祉学博士　田　中　安　平	

